

意識と言語習得

ソルボンヌ講義一九四九—五〇 (その一)

M・メルロ＝ポンティ／川本隆史 訳

〔解題〕『行動の構造』(一九四二)と『知覚の現象学』(一九四五)で学位を取得したメルロ＝ポンティの戦後は、リヨン大学講師(のち教授。四七年からは高等師範学校講師も兼ねた)としての研究・教育と、すべての人間の自由への闘いに対する連帯を創刊の理念とする雑誌『現代』での評論活動とを二つの軸にして開始された。リヨン大学での四七—四八年度の講義の一つで彼は、(一)心理学、言語学、社会学、歴史学において現われている科学主義の批判、(二)言語と思考との関係、(三)語る主体とそのコミュニケーションにおける役割、を基本的な論点にしたがら、言語の心理学をとり上げた。他方でこの年彼は、反共宣伝の恰好の材料とされていた「ブハーリン裁判」の正当性を擁護する論文集『ヒューマニズムとテロル』を発表し左右両翼から激しい批判をあびたが、この書はサルトルをマルクス主義

と共産主義へと「回心」させる役割を果たした。ソ連の現存社会主義体制をヒューマニズムの立場から支持するメルロ＝ポンティの姿勢は、朝鮮戦争勃発に伴う彼の幻滅、政治的沈黙まで保たれたのである。

こうした政治への積極的参加の只中であって、一九四九年パリ大学文学部(ソルボンヌ)の児童心理学・教育学の講座主任教授に彼は就任する。この抜擢は、驚きと同時に彼の哲学講義を期待していた学生たちに失望の念もまきおこしたらしい。しかし「世界とのあの素朴な接触をとり戻す」(『知覚の現象学』序文)ことを求める現象学者メルロ＝ポンティにとって、〈子供〉は決して外から押しつけられたテーマでも、たんなるアカデミズムの一分科の考察対象にとどまるものでもなかった。初年度の三つの講義を木曜日一日がかりでやってのける——「大人か

と共産主義へと「回心」させる役割を果たした。ソ連の現存社会主義体制をヒューマニズムの立場から支持するメルロ＝ポンティの姿勢は、朝鮮戦争勃発に伴う彼の幻滅、政治的沈黙まで保たれたのである。

ら見た子供」(午前一一時開始)、「子供の意識構造と葛藤」(午後三時)、「意識と言語習得」(五時)——ことを通じて、哲学を専攻していない学生たちを相手にしながら現象学を人間諸科学(心理学、言語学、社会学)の現場で鍛え直すという貴重な経験を彼は積むことができた。彼がコレージュ・ドゥ・フランスに移り「現代」の編集からも手をひいた一九五二年までの三年間、メルローポンティはソルボンヌで計九つの講義を行い、そのうち二つ——「幼児の対人関係」「人間諸科学と現象学」(ともに五〇—五一年度)——を聴講者のノートに自ら加筆して公刊したが、残りの講義(ただし五一年—五二年年度の「他者の経験」を除く)については彼がいちおう眼を通した学生のノートが雑誌『ビュルタン・ドゥ・プシコロジ』に発表されている。

以下で訳出するのは、このソルボンヌ講義のうちで、前述のリヨン大学での講義をふまえてなされた「意識と言語習得」である。彼のソシユールへの接近を示す重要な記録とも評され、さらにはヤコブソンやピアジェ、マックス・シェーラーへの詳細な言及もなされている本講義については、幸い「現象学・実存哲学研究双書」の一冊としてシルヴァーマンによる英訳が出版されているので、これを底本として用いて適宜原文を参照した。なお「」は英訳者および本訳者が補ったことを示す。参考までに英訳版による内容目次を挙げておこう。

序論 I 言語という問題 II 方法論

第一章 心理学から見た子供の言語の発達

I 概観(以上本号) II 満一才までの言語習得 III 五才ま

での言語習得 IV 言語学的構造をわがものとするこ
七才までの言語の進化 VI 七才以上の子供たちとのコ
ミュニケーション

第二章 言語の病理学

I はじめに II 言語的幻覚 III 失語症の研究

第三章 言語学の貢献

I 序論 II 言語学の研究 III 哲学的インプリケーション

底本 Maurice Merleau-Ponty, *Consciousness and the Acquisition of Language*, translated by Hugh J. Silverman, Northwestern University Press, 1973. Pp. xi+108.

原文 "La conscience et l'acquisition du langage", *Bulletin de psychologie*, XVIII: 236, 1964, p. 226-259.

参考文献

末次 弘 「子供の意識構造と葛藤——ソルボンヌにおけるメルローポンティの講義」『白山哲学』(東洋大学文学部紀要 哲学科編) 一四(一九八〇)、一六(一九八二)、一八(一九八四)、一九(一九八五)号。

佐藤由紀子 「子ども——大人」の現象学——ソルボンヌのメルローポンティを中心として『教育哲学研究』(教育哲学会) 四八(一九八三)号。

木田 元 『メルローポンティの思想』岩波書店(一九八四)。

〔I〕 言語という問題〕

A 反省的アプローチ

言語という問題は哲学と心理学とのあいだに位置しております。デカルトやカントの哲学的伝統にしたがう限りでは、言語には哲学上の意義が全く与えられず、それはもっぱら技術的な問題になってしまいます。

こうしたデカルト的伝統においては、意識と言語が出来る可能性など存在しません。意識が存在の唯一の類型であることを認めてしまうと、言語は意識の外部にあるものだからとして退けられ、事物と類比的なものだと考えられるようになり、意識と言語のあいだの内的なつながりはもはや存在しません。というのは意識がなにもかについて意識するためにも、まずそれは自己自身についての意識でなければならぬからです。この見解によれば、意識とは普遍的総合の活動です。他の人々は、ひとが自分について知っていることの投影に他ならないものとなってしまいます。この哲学的原理が含意するのは、ひとが決して他者と出会うことがないという主張です。この主張が独我論を免れるためには、意識が唯一のものだとする要求を捨て去るしかありません。われわれは個体的な存在者であるか

らして互いに孤立している。けれども考えることを通じてわれわれは、自分自身を普遍的なるもののレベルにまで高めているとされるのです。

この見方からすれば、言語は主観の秩序からでなく事物の秩序から生じてくることになります。話し言葉であれ書き言葉であれ、言葉は物理的な現象であって、語の意味と語の物理的様相とのあいだにある偶然かつ慣習的なつながりはそうした現象が引き起こすものなのです。意識のコミュニケーションは可能なことではありません。つまり私の言葉が他の人々に与えるのは、彼らが既に知っていることを思い出させるためのチャンスにすぎないからです。言語は表明されたメッセージではあるが、それだけでは効果的なコミュニケーションを意味しません。語はそれ自身何の力も持っていない。そうなる最良の言語は最も中立的なものであって、科学的言語すなわちあいまいな言い方を許容しない演算法アルゴリズムがあらゆる言語のなかで一番よいものだということになりました。こうした選好があることは、普遍的言語の構築を目指すさまざまな試み——すべての言語と思考とを包含する人間の思考の辞書がそのために必要となってきました——が実証してくれているのです。

以上のような考え方をとる限り、結果的に言語の価値は低められます。言語は意識がまとう衣類、思考の外装品の一種にすぎないものと考えられるようになるのです。他者

という問題を無視してはいないサルトルのような著作家でさえ、言語が思考にたいして何かをもたらすことは不可能だとしています。語は「力」を全く持っていない。それは既に存在しているものを普遍化したり要約したりするにすぎないのです。この点において思考は、語に対して何もものをも負ってはいないこととなります。

B 問題に対する新しいアプローチ

このデカルト派の哲学は最も実証主義的な科学の共犯者となつています。すなわち、その哲学は、言語を一つの物として取り扱うための完璧な自由を心理学に対して与えているのです。失語症を言語的イメージの喪失と見なす、現在では旧くなつてしまつた考え方がその例に挙げられます。

1 「言語の持つ意味作用の力」

反省的哲学と機械論的心理学との協定は、しかしながら問題の本質を見極めるにいたつた発展の結果、あらゆる面で解消させられているのです。言語それ自体には特別に何の難しいところはないとサルトルが言っていますが、言語は言語という定式化にもたらされることよつて行動の新たな形態の起源を示すものだ、と彼は注意しています。スタンダールの『パルムの僧院』を例として考察してみましよう。この小説の中で伯爵が恐れていたのは、そのときまでは未だ言語に表現されていなかった若いカップルの感情

が、愛という言葉を初めて使うことで堅固なものとされるという事態なのでした。

総じて、他者との関係を真理（「思考と実在の一致」）という価値に基づかせ続けることはもはや不可能です。つまり、他者認識を避けて通ることはもうできません。言語を問題とする限りで、この認識を突き詰めていくと、言語が個人間のコミュニケーションを生みだしているに違いないという主張が生じます。その結果、言語は自我でも事物でもない以上、それは何かしら神秘的なものとなります。心理学が既に語は事物でないことを発見している。このことが、失語症がもはや言語的イメージの喪失だとは考えられないこと、理由なのです。失語症の患者は語の組み立て方をまだよく知っています。彼は「赤色」という言い方を知らないけれども、「サクランボのような赤色」という言葉は言うことができます。K・ゴルトシュタイン（Kern Goldstein）（ドイツ生まれ、ユダヤ系の脳病理学者一八七八一—一九六五）「失語症の分析と言語の本質」一九三三によると、失語症は語の喪失でも観念の喪失でもなく、「語を表現するにふさわしいものとする、そのもの」の喪失なのです。意味のある（sinvoll）語を意味のない（sinlos）語から区別しなければならぬ——すなわち、語の中に意味が現存していることを認識しなければならぬ、というのが彼の見解です。この分析はわれわれに、言語がある種の意味作用の

力を有していることを示してくれます。

2 言語学の発展からうけた諸影響

ソシュール『一般言語学講義』一九四九(岩波書店)によれば、言語とは全ての話者が使用しうる語あるいは観念の寄せ集めではない。言語は観念の集合に対応するサインの集合ではなく、むしろ独自の全体であり、他の語の集まりが次第に自己を分化していくのに応じて、それぞれの語がその意義をまとめあげてくるのはその全体の中においてなのです。

言語学者 G・ギョーム [Gustave Guillaume, *Langage et science du langage*, 1964] によると、各々の言語の基層には言語の基底となるシェーマ(図式)が拡がっており、われわれに(たとえば)所与の言語のなかで時制をつかった体系的な知識を教えてくれるのはそのシェーマなのです。しかしながらこのシェーマは個人によって考えられたものではありません。それは主体の意識の内部にあるものでも、外的な実在でもないのです。したがって言語が事物でも精神でもないことからして、言語は不明瞭と両義性とを特質とすることを立論の基礎として仮定することができます。

3 文学の経験が与える諸影響

言語の文学的経験が上述した言語の諸特質を確証してくれます。この百年間で、言語は作家にとって「思考の衣装」以外のなにかになってきました。それ以前の古典

的な作家は言葉に対して絶対の確信を持っていたのです。

たとえば ラブリエイエル『キャラクター』一六八八(岩波文庫)は、たとえもし作家がそれを見つけ出していなくても適切な表現というものは常に存在していると述べていました。結局のところ古典的な作家は、言語が既に事物に内在しているということを当然のこととして仮定していたのです。J・ポーラン(フランスの批評家一八八四—一九六六、『タルブの花』一九四一(晶文社)参照)は、事物が言い表わされた途端にあたかもそれがずっと言われてきたような気がすることを持ち出すことにより、古典的な作家の幻想を分析してくれました。語は観念を現実化するとともに語が忘れ去られることも可能にする——言語がうまく行くことと思考がうまく行くこととは同一の事態なのです。言語は、他のあらゆることを明瞭にするというその機能の点に關して不明瞭なのだといえます。それは観察されたり直接に把握されたりできるものではありません。言語は行使されることのみが可能なのです。

C 結論

言語は事物でも精神でもありません。しかもそれは内在的であると同時に超越的であるのです。だがわれわれは、言語に当てはまる諸法則をなお発見しなければなりません。この問題が常に言語習得の研究の核心であり続けるでしょう。

う。言語を心理学的に検討するならその明瞭化の機能が明らかになり、さらに心理学の問題は哲学の問題へとつながっていくことになりましょう。

〔Ⅱ 方法論〕

A 〔反省的方法〕

これまで見てきたように、言語を一つの物に変えてしまおうとするあらゆる試みは失敗に終わっています。だからといって言語と精神を混同すべきでないことも明らかにされています。記号（シーニュ）と記号内容（シニフィエ）との区別は、言語にたいして当てはまるものではありません。反省的方法が言語の研究に関して無力であることはすでに分かっています。では帰納法を使ったほうがいくらかでもましな成果をあげられるのでしょうか。

B 帰納的方法

帰納という観念を明確にすることから始めましょう。ジョン・ステュアート・ミルは自然の相互関係を記録する単純な過程が帰納であると考えました〔論理学体系〕一八四三。『人間の経験と物理的因果性』（一九二二）の中でブランシュヴィク（フランスの哲学者一八六九—一九四四）は、ミルの理論を分析した上でそれに反対しています。だが彼

の分析には相矛盾する次の二つの要素が含まれているので、彼の立場はどっちつかずのものに留まっています。第一に、彼はミルの経験的態度にたいして異議をとなえませんでした。つまり事実の間にある相互関係を指摘することではなく、むしろ因果的なつながりを確認するための諸変数を定義することが問題だと彼は主張したのです。したがって積極的に仮説を立てることがまず必要となりますが、事実が自然の中に見出されえない以上、それは何よりも知性を用いる仕事であるとされるのです。

第二に、仮説と実際の事実との間の関係を検討した際ブランシュヴィクはこう結論づけています——帰納法において検証可能な唯一の要素は、現象の相異なる諸変数間に存在する数量的関係の総体である、と。仮説がわれわれに与えてくれる事実のイメージは検証されないけれども、諸事実の間に設定される方程式の全体だけは検証される。たとえ理論（事実のイメージ）がそれに続くものによって反駁されたとしても、方程式のほうは新しい仮説の言語に翻訳されるものである限りにおいて、何らかの意味を保ち続けることになるわけです。

このように一方でブランシュヴィクは、帰納法が所与の事実の寄せ集めではないことを示しています。それは知的理解の企てだとされるのです。だが他方、その結論は検証不可能とされます。なぜなら探究されるべき現象の本質を

理解させることが帰納法の役割であるからなのです。

それでは帰納的方法によって言語の構造を理解することを望みうるのでしょうか。諸変数間の関係を調べても言語の本性がわれわれに明らかにされはしません。帰納法が教えてくれるのはせいぜいこのことにすぎないのです。

C 現象学的方法

以上二つの方法はどちらも役にたちません。しかしながら第三の可能性が残されています——事実との接触を保ちながら、事実を丸ごと理解し読み取り解釈することを通じて事実の意味を与えることのできるような、方法が。現象のさまざまな変化の中から一つの共通の意義を取り出して、くるために、われわれは現象をあれこれと変更しなければならなくなります。しかも前もって定められていた仮説を証明する役割しか果たさないような、諸事実をいくら寄せ集めてもこの方法の基準にはなりません。証明なるものを敢えて求めるとするならば、現象に対するわれわれの忠誠、すなわち用いられた素材に向かってわれわれが正確に身構えること (La prise étroite) およびある程度まで純粹な記述に向かつてわれわれが「接近すること」、この点に証明は懸かってくるのです。

この方法が最近の動物心理学でどのように用いられているかを次に考察してみましよう。動物の行動の観察者たち

は、初めのうちは絶えず人間の意識を観察された現象へと

投射していく方法を使っていたのですが、やがて厳密に客観的な態度を採用せざるをえなくなってしまうました。しかしすぐにこの態度では不十分なことが明らかになったのです。こうして測定可能なものだけを理解することに不満を抱いていたケラーは、類人猿の知能に関する綿密な実験の中で一つの特殊な方法を用いるにいたしました (W. Köhler (ドイツのゲシュタルト心理学者一八八七—一九六七)

『類人猿の知恵試験』一九一七 (岩波書店)」。現象を総体的に記述するために測定可能なものにばかり注目することは十分ではない、と彼は見抜いたのです。類人猿の行動を記述するにあたって彼は「人間に擬せられた」用語、たとえば「解決策を偶然発見した」とか「幸運な誤りによって」とかいった質的な意味の違いがある言葉を使用しています。類人猿が解決策を見出すのが理解力によってであれ偶然であれ、客観的な (量的な) 結果はいずれにせよ同一なのです。から、純粹に量的な分析にひたすら留まり続けるのは不可能です。「類人猿は問題を解決した」と述べることで、ケラーはある種の擬人観を導入していますが、それは不可欠な見方といえます。行動の中に真に著しい相違が見られる (すなわち、正確な解決策に到達することはメロデーにのった連続的な運動であるの) に対して、偶然に解決策を発見することはあくまでも突発的かつ非連続的なものにす

ぎない)ことを理由として、量的な分析を越えていかねばならないことを彼は強く主張しています。したがって状況のうちに主観性が存在している以上、われわれは主観的であらざるをえない——しかしこれは、恣意的であらざるをえないということとは異なります。

ケーラーは帰納法を用いて研究を進めているのでしょうか。確かに仮説は設けられているもののそれが説明しえない事実を訴えている、という意味ではそうです。だが彼が現象の内在的な諸特性(caractères)の分析を始めるとなると、動物の生活はもはや観察中の行動へと還元されるものではなくってしまいます。観察されている動物がわれわれに提供するものを全て、ある抽象的概念に変えてしまうことは不可能です——われわれは自分たちの人間的な見方を遠ざけてしまうことができません。

コフカのような他の人々は、こうした方法の基礎にある「記述的な諸概念」の本性をはっきりと指摘するとともに、心理学の分野で今やそれらの概念を使った「機能的な諸概念」の解明が始まっているといえます〔K. Kohla (ドイツ)のゲシュタルト心理学者一八八六—一九四一〕『心理的発達の基礎』一九二二〕。コフカとケーラーの言では、観察された行動に関するわれわれの経験にこのような仕方では訴えることこそが「現象学的」なのです。この方法によれば測定可能なものばかりでなく質的な記述を行うことも有効な知識の

うちに含められる点において、この方法は新機軸を打ち出していきます。こうした質的な知識は決して主観的なものではなく、むしろ相互に主観的なものだといえます。それは全ての人にとって観察可能なことから記述しているからです。

われわれが言語研究の方法として採用しようとしているのが、この方法です。われわれが事実を研究するのは、事実を超越している何らかの仮説を検証するためではなく、事実それ自体にある、内的な意味(intensiv)を賦与するために他なりません。この上なく重要なことは、ある事実の細部のみならずその総体をも包含する厳密さであろうと思われます。

またこの方法をゴルトシュタインが失語症および失認の研究で見事に活用しています。行動の全領域を探究することを目指している彼は、多数の被験者に共通する兆候を考察の対象とするのではなく、ある一人の被験者の完璧な分析に関心を集中しております。こうした理解の方法は他のものに劣らず厳密なものです。なぜなら帰納法が事実の多様性を捜し出すにすぎないのに対して、ゴルトシュタインの方法はある一つの事例を徹底的に究明しその核心に迫ろうとしているのですから。

結論として、ベルグソンが定義しておきながらほとんど実践しなかった方法を適用すること、これをわれわれは提

案します。つまり彼は、科学者によって記述されている諸現象の隠された意味を哲学は明らかにしなければならぬと主張していました。哲学の役割は、物理学者が見ている通りに世界を再構成することにあるのだけれども、物理学者は言及していないが質的な世界と彼との触れ合いによってもたらされる「外縁」を含めた意味での世界の再構成でなければならぬ。「形而上学入門」一九〇三。われわれにとって心理学と哲学との間に何らの違いはないことからして、ベルグソンのプログラムは今なお有効だと思われ、心理学は常に哲学を暗黙のうちに含みかつその萌芽形態でもあり続けており、他方哲学の側もまた決して事実との接触を放棄したことがないのです。

われわれは言語の存在を理解するために以上のことを基礎としながら、次の四つの点を本格的に問題とするつもりです。

- (1) 心理学から見た子供の言語の発達。
- (2) 言語の解体に関わる諸事実。
- (3) 言語に対する言語学のアプローチ。
- (4) 文学によって代表されるような経験。(作家は自

ことは一つの個人的な言語を学ぶことです。作家は自身自身の言語および彼の作品を愛読する公衆を創造しています。したがって彼は高次のレヴェルで言語の創造を再開しているのです。)

第一章 心理学から見た子供の言語の発達

〔I〕 概観

生まれてから最初の数カ月間、子供は泣いたり何かを表現する運動を行ったりした後、喃語を言い始めます。この喃語を言語の祖型として考察しなければなりません。それは何にもまして驚くほど豊かで、周りで話されている言語の中にはない音素、しかもその子供がいったん大人になってしまうと(たとえば彼が外国語を学ぶためにそうした音を再び習得しようとする時に)もう同じ発音ができないような音素を含んでいます。したがってこの喃語は一つのもの多型的な(polymorphe)言語であって、その環境との関係においてあくまで自生的な(spontane)性質を有しています。(それは、聾啞の子供の場合たとえ十分に発達していても実在しているのです。)しかもそこにはきわめて多くの模倣が存在するのです。この模倣は生後六カ月から一歳までの間に絶頂に達しますが、その後も子供が模倣している言葉の意味を把握していない限りでは依然として原基的な役割を果たし続けています。喃語と言語の間にある関係は、なぐり書きと図画との関係と同じなのです。

この模倣は言葉ばかりでなく文章のメロディーに対して多大の影響を及ぼします。というのは、子供が試みているのは、言わば「一般的に」語ることであるからなのです。

W・シュテルン「ドイツの心理学者 一八七二—一九三八、『幼児心理学』一九一四」は、彼の娘が会話の口調でしかも何も意味していない、外国語のような「言語」を一カ月ものあいだ語り続けたことを報告しています。(その子はちょうどお話ごっこをして遊んでいるようだった、とのことです) ドラクロア「フランスの心理学者 一八七三—一九三七、『言語と思考』一九二四」によると、「子供は言葉のなかで泳いでいる」。子供は、自分の周りで繰り広げられている会話に惹つけられ心を奪われてしまつて、自分でも対話をしてみようとするのです。

言語は、全く身体的な活動を拡張したものでそれから分離することはできません。しかし同時に言語は、身体的活動との関係において全く新しい性格を有しています。身振りや物真似といったものからなる「総体的な言語」のなかから発話が生じてきます。だがその発話は形を変えていくものです。かねてから発話は、発声器官にとって自然なものとはいえない一つの機能のためにその器官を使用しています——実際、言語はいかなる器官も持ってはいません。

言語に寄与している全ての器官はすでにそれとは別の機能を果たしている(サピエー「言語」一九二二(紀伊國屋書店))。言語は一つの上部構造として、すなわちもう一つ別の秩序があることを証明してくれる現象として見なされるのです。

問題は次のことを理解することにあります。言語はどうやって疑似生物学的な活動から生物学的でない活動(にもかかわらずこれは、言語を対話へと積分している、運動もしくは活動の全体を前提として持つ)へと移行したのかを。

生後九カ月から一歳半までの続く期間に——普通は一歳三カ月ごろ——話し言葉が現われ始めます。この期間の初めから子供はいくつかの語の話し方を理解しているのですが、一種の停滞期間がそこに存在しています。たとえばプライヤーの息子は六カ月間二つの言葉しか話さなかったという記録[W. T. Preyer(ドイツ児童心理学の祖 一八四二—一八九七)『子供の精神』一八八一]、シュテルンの息子は一つの語だけを二カ月話し続けたという報告があります。これほど正確な観察結果が出てこなくても、言語にはある種の潜伏期間といったものがあるために、このような現象はほとんどの子供に見うけられるのです。

(解題・訳IIかわもと たかし・専任・文化学原論)